

50

45

40

35

小村虚日志 昭和十三年 四月以降

特別  
14  
1919  
627



小村庵日記

昭和十二年四月以降

四月十五日

晴。風つよし。朝未だ旅館を出たまゝ坂上山花を見  
例の往駅を経て、大谷駅に生息する鹿鳴鳥に接  
遇。佐藤場原在郷。朱色鹿渓駅。安田守洋保  
次郎。木炭一俵を運び来た。立時車渡  
町木二家。附り大谷駅を終り駒木、夜未雨。

十一月

此處太冷氣太乾燥即多日奉公并二發燒寒氣故  
味也空氣也此野村保次中二十大約入客的多易忘記  
作以素之、乃即給予生食處皆無事、飯水酒肴  
可得衆物及蔬菜及茶所入燒姜之能布也  
多々、尤其燒肉之火鍋之三福之酒飯了也、酒也  
後於板之臺子、鍋田移造之來也、今夜太陽之被  
之懷へ今あり所方につき火席

十七日

橋原

時各至谷口、或之而返、酒を投す。林源小木  
木に立て、又向碑、或之、えと副くし四面を作りの  
舉あり、松葉を三字額を相應し、松葉微  
高す、十時半先と付く。豊崎國を渡て、自高車  
も立て所もあらず。武昌壁を立等々、夜不在地主  
より宿をり。今之已れとこそたんび、亦めよ  
而也、豊島國を花敷うせむ。新羅の付くよ  
うく石祐井川を渡て、左折立段にて、登  
馳走る。身光る事も無也、時有り立て程々、

大ボーリング場にて松山市長と同席を就き後一月りん  
又六時半十二時半も自動車と倒立演劇にて一年以  
來未だ酒飲むも無い。武三事も烟も整理し等  
をうへ是より島本峰山依秀平吉三吉三吉  
雪嶺喜寿祝賀会の奏樂人を取めまし

十八日

日

西浦和行多々三方八四十九歳伊達モ子モアリテ之ニ  
娘エ香典ヒ加モ持セモ老ニ朝未於母と養トマサ小  
室原故父ニ歎面モ郵送タ余ニ寄稿モ取リテ

穂原製

新潟駅にて車に取空燈臺建設を證す。又也。午  
後数東干往新橋迄。而して御臺を降りてゆき。此安  
後又旅館を差し付。

十九日

晴。閑人中多シ矣。阿部宣政以テ押上亮モ頬  
まみ、原田重吉モ可見。其ノ夫モ夫モ御臺  
奉祝賀。今多角化ハと云ふ。午後散策三時  
丸じんに約を頼ム。之物。

二十日

晴、雨部立人の為押立、左朝鮮向島川  
三番十一時放逐立ち居居入り道成寺の陣列  
を一見四名を二段も船へ、中も御用の個人  
於法門を歩み高と淺井、難波と京、夕陽又  
利、危未微雨

二十一日

雨、高人氣がる終日家若無聊、因しふ葉下を弄  
すま歎く、仰此能ひと嘆也

二十二日

晴、嵐回身亦卓哉、近角谷三度之來也、坐  
改部の東洋市目酒、社若全残額四十九万六  
十二円七十合、領内、本毛子一船の牛込支度  
一船六百四家用として預金と引出ま、教集  
りあり伊勢丹念奉、酒飯しげンギス汗  
肉を以て、十一時とて、其處を宴樂と充  
あ、俗取扱、酒を引うかめんげとも鞠う  
味噌湯一樽引来、吸送紙も重ね御金川  
未だ多額未だ有りき又蟲ニ多品を貰ふ

二十三日

昨日の雨が止み、川は少しこもがれ、石場とゆ  
母の計利よりか賀屋にゆき、とくに娘の計利より  
えとはうとうて、宿に横おう宿にて、歸り、八時と  
ベーコンを真山中大山と見し、とおひす室の  
氣あり、三福の三宝丸酒を飲み、寝て、  
寝ます。

二十四日

晴、加賀を三日で出で、美濃へ、石川へ、尼居に居

櫻原

此十四日入門式も終り、丹具も化粧の梅道紫  
高卷改裝成り、覺連、工役部、春道吉首  
院と名家と簡、靴も寄附を來れ、東莞吉五郎所生の抱き枕と、而亂め  
御観、配牛、十一時散策不動の叶、身を、飯  
す、お部宣、三ツ、手の握りもの、お書き、身を、ま  
付午後、私と五郎、抱き枕と、接ひ、聞奥前  
多未間、夜よし余、方舟とねり、室、脚本  
栗、剣利器、利ひ、義理、時を移す

二十九日

日

時、新潟白山公因ニ天井、書院の壁と更に奉手、有  
並設え全り増文も需りあり、同書所據合  
ひ未だ丹青の序平井と奉手書道元、亨二年を  
考す。市山高木と曰く、御一と云ふ出納下而之  
散策行なふ事、御一と云ふ出納下而之  
丹三協平井が、電車の団旗業始まる。

二十六日

雨、朝未暮東吉道丸、授すべし名家手稿、貴集

樺原製

の出ハ出の筋を抜き、午後ニ着手、後四十五紙成  
る。高田与散、金三十石、印、支給、三  
重、海未かう人大森、条次、上、下、押亮も需の末  
又午後又五行、革作、解決の、行文、跡、おせり、此未  
電車台業漸やく解決の、行文、跡、おせり、此未  
靖岡神社大祭、行、桂十数台、要、小屋上、起立、

二十七日

雨、午前と整理して、奉手出道後、宣すま、出の  
部屋、座候、假のう斗、圓丈、大物、行方、一冊、死本、先

四はひむく二三の薬をも詰ひ三福へ致してゆく  
アーウサニグリ洋本スケッチ、ブリリクと譲り、板本謹  
至る。三四文行、其後事方次に見矣。

二十八日

此朝未就寝を甚だ多く小林屋達も未だ火災保  
険継続の件まづ吉高堂より本社保険部鈴木作太  
郎未接、午後啟至。日本橋松原町毛利と申す  
内へ、不立ア。竹花政茂再訪五月一日所今の  
懇意今更内刊ア。晚同玄都の下村正太郎

樺原製

東洋葉子を贈り下村正耳内研究ニ  
熱す。ヒダキ、筑郡の内美を贈ニ

二十九日 天長節

此早大紀念書業者募集勧誘狀附ア。日本勧業  
銀行ア未だ泰東書院院主未だ長井市三  
碑、持毫外ニ額面三枚揮毫、山田吉左  
助中澤義一時も耳種故書、於古堂にて  
手稿ハ秀出、及今墨酒飯にてかく。

三十日

晴風。難波到すと云所確押亮。後就き  
利久、丹喜原子と来む。十一時東成城  
芝谷の投票を畢り、早大の演劇がくお詫。利久  
向ふ今日現るを語り、院又三時演毛、邦枝完二の小  
説「桶口一葉」を讀む。齋藤久之鍾人君に病臥中、  
行賀未全映。利久は直ちに戻り奉つた。牛込  
矢本小宅を借りて久之と新居セーチル。六  
月今日人占を以て掃除を行ふ。

立月

一日

晴れ未就枕を兼まゝ龜山書三手沿山陽惣  
と毛墨、七色の小画冊を贈る。早大行少の  
記者未定。宣文館寄稿と約定を主と、窓の  
絵版印刷平二角、十時半出浴。日中の多  
矣。また引摺、木製床拂いり出来、之へ貯水  
あり、アーヴヰニグのスキッヂ、ブツクを送り、夜未  
而あ。

二日

日

雨、朝未早着。大雪。手に枝木と鐵の銀鍠。山  
嶺へ。宿を草に投奔。高麗故古事記。和と記ら  
る。空は碑。松。毫の札。雪。夜。今。月。星。北  
二十日未。午後。神。高麗。北。汎。毛。烽。大。深。北。  
其代六角。市。多。北。饼。代。六。角。拂。渴。大。森。參。北。  
ト。御。多。利。八。此。尚。西。宮。

三日

晴。朝未。雲。作碑を改書。午後三時。自動車

走距。里。提。言。問。到。り。高。拔。山。方。次。其。北  
百。萬。里。王。行。ひ。言。問。の。橋。上。と。仰。北。國。東。の。四。人。と。今  
丈。十五。六。人。之。度。小。島。丈。太。(鳥。の)。山。岸。高。蓋。井。田  
秀。也。路。田。銘。生。三。宅。私。軒。等。三。全。丈。酒。九。日  
以。下。趣。味。走。流。八。時。自。動。車。走。起。之。物。也  
矣。午。後。時。久。微。而。夜。

四日

晴。高。氣。流。支。之。水。雪。冰。碑。の。地。毫。走。文。寄。  
枯。え。旅。宿。義。未。加。參。幸。一。夕。山。附。詩。物。り

館定を需む。あくまでも、既に大賀一郎博士  
事務、鶴見研究室の時も該す。難波別  
庄にて、先子三川の在宅にて、  
形の本の如きと蔬菜を寄せられ、大賀博士  
士（著）の研究と聞す。印刷物二種を贈る。  
丹吳協平を訪、難波を養す。満夜一宿の代宿  
す。

土日

岐風朝未卯之間東へ寄すべき八百膳と一箱と  
原

太白鳥者無く、未だ書未考處。之は縣肝臚印  
税の一百圓送り来る。火柴伍段、如眼鏡一付、  
如意鏡又矢束、引綱の手を訪れ、か一ぱり支え  
ニテ、自若入四月引出、土官元々將全額  
支、折合三種ニ割り酒食一石の人、去代四年、  
三十三日半四十圓二口半、及前引額全小計半  
月外生す。

六日

晴風、暮月令呈上安、先日走て奉是に赴く朝

未定例の大掃除を行ふ。至高モ一校し。師土御車。旅  
徒。市内。アリ。朝食。出。起。ビニ。墨汁。と。险  
峯ト。峰ノ。東京駅。公事。に。スタッフ。を。飲。あ。金の枝  
鶴。と。水。川。早。宿。大。空。ソ。シ。福。利。土。時。紅。華。宿  
ニ。赴。キ。睦。今。海。か。今。今。今。ハ。布。西。馬。番。也。今  
貢。経。出。席。

七日

四。十時。出。向。不。急。北。美。殿。と。頃。い。す。岐。至。川  
瀬。北。春。往。以。高。修。公。ゆ。確。而。并。日。漁。宗

世。の。城。越。二。氣。品。の。隊。列。さ。之。山。木。立。考  
の。因。顧。七。十。年。と。頃。い。四。公。量。酒。領。一。て  
袖。り。支。田。和。男。と。之。と。三。宅。雪。嶺。大。妻。取。笑  
令。手。づ。の。通。じ。未。フ。

八日

晴。朝。未。難。ね。と。着。す。小。林。空。三。五。流。殊。彦。神  
社。と。前。宮。司。高。屋。美。忠。御。日。月。所。彦。神  
秋。高。色。赤。一。輪。七。時。未。ノ。波。高。曾。望。一。重。の  
卦。卦。午。後。光。正。符。の。も。相。付。と。上。而。毛。多。散

余、仰聞山木正彦の西歿七十年を餘り  
寺ニ驛而引り、寺大史松嶋巨泰所もせ善し也  
（さう）十五日より十六日と史料展覽会の爲め列  
2

九日

日

晴風、朝東正木立春より回歿七十年。寺傳當時  
を移す、從ふじが、出立の日、三福・酒飯・浅空其  
勤の白銀傳と將小物を後、後もか出や。早  
大生作之間、五十九山陽、屏風一アリと被衣  
あり鉢室を拂ふ慶也。

未だ御子をもとより其跡にありて、何事か未だ  
之人、大然、圭次、もとすむじ全、危翠の言を讀る  
也。故ゆき嘗一妻、死去つき、弔物とあがま、殊  
産、吉田高麗太郎に承ひともぞ、うつ  
ぬの母族接ひ未、相名英三、象山の也、陰を持  
未り鉢室を拂ふ慶也。

十四

晴利未、難病を患ひ、生限御身未有也、其孫  
相名英三、象山の也、情に病て、東陽松浦時次

とまよも原友が在り相之所印未正五  
方多枝大伊藤丁春も其書已般日後  
先の引而押毫を以て未正十一時と致東向  
木尾に用を亦し、す皆是清々達る辰後今  
ぞ兄弟、ゆゑに問に乘じ起兵撫安とおもす、新  
潟栗林もちれど母國子糸未

十一日

嘗、朝未就寝主事中也飲酒其物也と詰  
テ、白鳥者坐し未と沙翁の三篇ニ酒食

十二日

時、英帝戴冠式舉行の日也、因て其儀も庭園  
手前の手入主事、正村文則も来也、十一時の本將  
主政葉立高寺公也酒飯す、公も清貞と中  
良の如し、傍多の大臣吉次、參山、難波と並し  
能むと後ひ、余の意欲と板門堂旅宿美作古  
之指揮

十三。

晴。平朝小久江等一匹夜九点より報到。因て報給。又  
まよ、龜山等三束。横山陽清物の運びを慰藉。雪詔  
松大田等を製。内付。又江方を浴ゆ。又。持香資十  
日。始終。あめ御手を支在。古井上見ニ。西山市心  
按。移玉。未だ。御の難波殿。午。雪球碑。御虎  
の面。北川。外出。御仕。午。午睡。一時間。差しの  
未だ。御身を負す。御公美事の御从。もらひ。又  
飯山勝吉。本詔。御と御と。高森精祐。計。御  
ヨ

十四日

晴。日本郵船今庄總舖。御来。本物配事。冬也  
山の邊。北川。二三難儀。モ荒。木村山秋浦耳  
訪。九州漫遊。モ難。松。モ解。白馬。尚吾。酒。ア  
リキ。七事。り。宿。松。雨。極。モ。終。午。後。お。生。松。竹。無  
行。食。也。モ。宿。松。株。參。の。事。モ。変。支。白木。食。毛  
利。公。寄。所。居。ラ。皆。豪。東。辰。毛。又。鐵。萬。毛  
辰。毛。又。三。時。以。シ。微。雨。朝。又。難。経。モ。養。シ  
テ。晴。暮。レ。又。補。食。未。リ。凡。是。終。起。ミ

十五日

所院御宿め候。古道祭を行ふつもし古道の邊  
墨四面旗引ひあり生す。松上弘前事リ近射を旅  
支店船を蓋す。水田を岸の故三輪海と呼む。旅  
後三昧の飯山勝吉東北寺再興の資金募集中へ  
坤毫を詣れ。云々。午後高麗苑鞠鞠り其が  
式。晦に久多支入江守一の書が式。歸近文三  
未シ久未。

十六日

日

藤原製

微雨氣温下り朝未終休と着す。支江の邊旅  
旅社。未<sup>ノ</sup>出御室にて坤毫三枝文休傳  
ん。か出度。公室に宿してゆく。此時驟雨あ  
り。六時高麗苑鞠鞠する三室。雪嶺大焉り  
祝賀今に赴く。今衆四百人。

十七日

晴。朝未終休と着。此時之移未。此處の洋食  
朝ちまゝ宵を食す。まゝ不倫快。之に午後高  
寐於社を讀み、晚而小風堂と也度外。

十八日

時後山風來と、中鳥居一木込大和若谷寺の件並に支出来少假多の件を話もまた、数葉からるり伊根再々屋をぬし、佐喜移附も菊池室えの天誅但義長を讀む、アリモヤ終日而相手理す、旅法東洋故宋と死し、甲物要取山音乃木行軍詩碑、建設の記すと讀む、不以手写し未だ

十九日

迄、早朝四十九の日を決算書を并に社員の通帳利3、烟草新規の審査を需め取引、直ち不誠の父、一形と草くも寄す、午後完口付用白手も同動車、そと乗合に乗合、接続移送の事もと訪問、権利の便益も併せたが、午と引保りえひい乃木村の山から山から緑色を涼しい心地よく感し、北緯41度30分、東經139度45分、田園をばらてて見るんれ机大や神社をえ、其の隣の釣竿を乞ひて、机疋拂を乞、終は聚と在のことをよひつづけ

ルを元、古城の城跡王見し國並に出づ、伊豆衆  
公自私至一の停車も待つと仕合としまえに  
乗り、日向馬鹿まうま鹿更に金車に引船の  
高で果物店橋上に支酒を仰げて御了府  
税市税の徵要利ヨ六月十日納付

二十一日

晴風、朝未報紙を景一時を移す、大坂住友同  
西信託本社儀にて東洋牙毛の海光と貿易  
隨意三種を贈り御礼ニ充つ、晚乃風致を微

而別、向三乘ともハ強於徳主禮也、相見無事  
高木正・神風船台満正に附着。

二十二日

微雨、石和早中接長校務につき其役、余日接名  
譽社員とす。而半傳漸やく志向と、ちゆう念企  
坐ニ領支惣毛獲、旅銀と薦す、旅食等  
無事泊の物差度、寢後ラジオが河井監修の  
後の行者の朗读と少く

二十二。

壬午夜十一時宿高橋、朝未起。其妻大子、早太夫  
務不見し。急報あり。布義和丸電車に觸れ  
重傷と定ひ。遂に告別す。五未欣達と未也。午  
後一時後到着。抱被に赴き。直送醫院へ。嵯峨  
四郎、今清、原等と見。余は近藤・鏡正也。  
午時抱被、出張部屋印税印及桂田飯造より  
未也。

二十三日

四

明、朝未抱被を兼ねて、固丁身、なりテ入る始む。  
武昌十号にてと擇除。餘因候達。其妻鏡  
在而未見客も無る。十一時少陽社の三福に抱  
と緋の酒飯と。未だ未だ夫を尋ね。其妻  
を察。未だヘンキ居終。屋上のアリキを全滅

二十四日

而、五未未未未未未未未未未未未未未未未未  
吉辰ノ落日後半。銀座百貨店営業。新橋の  
母川花火大会にて物語。午後二時、高麗の大

即の先が式に歸る（予與太田路）難船にて  
す。早速、此處へ來也。

二十九日

（國二十二年正月）

此、未だ美濃の鎮守、治狀をもとす。山西山川  
東路、十時少し前、家康到了、旅館にて食す。  
吉崎雪仙翁、打山祐清の消息到る。丸長、西  
洋、小吉、本辰、佐今毛光、吉崎屋、食事と飯  
をねへる。作成手、春子、ハタモ野口、午後  
突然田中光顯、伯直、物語甚、三冊を贈呈す。

二十六日

此、御来難在着矣。海の矢敵事、自是  
日不里手、宿侍も候らず、晴天一時向ひ、之  
あふ、國子二人耳、國寶、伊豫千春、  
井上、大河内、未也、而候そ求む伊豫千春、  
かども、技、石達子の侍と、時と移す、秋満  
舎、井上、田舎送りと未也、多般、行方不明

二十七日

雨、予の寄船を收めども、難波、者達、一、二、精利、在里  
現當の宿を候ひ、坂口獻、未可、候。て、寂寺、り  
件ありき、丹生原、手、も、未、也。其の、中大、  
と、佛事の供物を、持つ事、午後、女、渡也。此時、  
移す、わら角、各、さ、加治、米、一俵、來、是、滿室、  
歎跡、紀念、也。

二十八日

雨、朝未、於、家、を、着、す、日、支、家用、全、六、万、日、預、金  
引、出、す、十、時、三、市、面、用、之、後、三、赴、き、園、寺、宿、場、今、り

記、予、に、路、あ、不、立、ヤ、武、尾、尾、未、訪、産、因  
矢、故、ら、未、也。直、前、、ゆ、き、を、失、ま、く、穴、子、田  
中、村、將、馬、(星湖)、未、往、不、遇、直、前、、香、モ、郵、通  
日本郵、配、る、六、分、於、立、田、鎮、寺、

二十九日

雨、朝、暮、石、里、子、の、侍、を、後、み、畢、し、收、未、也  
右、ミ、お、を、膳、三、福、と、酒、食、一、て、ゆ、る、方、義、次、左  
毛、を、未、向、山、う、ど、を、終、了、未、る、午、後、三、完、一、雪、岩  
の、人、の、行、路、一、と、後、也。

三十日

日

而後氣溫低下、國丁二人來る、別府鳥村山秋  
雨も止ぬ、鳥の生命保護を今配達十七圓  
四十八支引來、町内の純粋新浦代金の内之高  
齋村金田湯川湯が、乃而は三福毛記も酒食  
しゆ毛後後毛時と移す、早朝四中高  
社火今、火祭りと稱、未の私公八重子、  
車と雪嵌の人の行路と讀む。

三十一日

泰原

晴、國丁二人来る、朝未、雪嵌の人の行路と  
讀む、新浦の寝具、午後、船出と散策  
不立中、雪嵌平耳の、非主事の渡り船  
散と散て、一紀運、一月の結果、政府有利とす  
改民西草の聯合、追越と作、かく風に、總歸  
解と至る、金子馬流、博士急丸、難利、  
夜未、雨

六月

一日

雨十日余舟中一月未盡、余日授稿。此旅泊所。六月節。福井。十八日大日本郵便公司株主。江口通勝。福井。平大廣生。研究會。三十日年紀念雅言。書已寫。午後啟景。給定。船。賄。四月。午後函電。組閣の大令。色斷公下。

二日

原謙

時國丁二人。自。西村文則。馬。源。宅。洋美。平。東。湯。乙。宿。寺。每。日。三。玲。伽。志。如。丹。其。底。平。源。因。本。七。時。因。勉。未。該。作。義。澄。事。多。故。之。續。

三日

時。九。時。古。高。山。而。傍。ニ。赴。往。手。持。士。の。葬。儀。臨。正。金。十。日。香。奠。王。齋。之。式。終。リ。同。逝。之。所。祭。善。歸。之。乙。宿。寺。之。往。之。據。漢。文。內。幕。三。十。日。比。

谷内に事こねう、至入一中も行判大トロス  
トイ全集の言所、或也集二冊を立て本  
日、パンキヤ屋トラン合板を金リ換へる少額部  
十九日、佐倉通印未

四日

而、家外洋装本目録を作り半日を費す。午後  
早々法布小物と書道と生じての後、丹波の原寺  
に来り天取夏日と、黒鬼運動と皆守保陰  
の近薫を窺ひ、近衛内閣成主奉茶

書道院と舊社十日利、圓音政協令と  
未書、余入一中、御と見合す。

五日

は、武の庵主事、賃金ニ万円引生ま先  
六日松作、小柴主印之七来院、丹波、既に未  
回付日未、移手とセヨ利リ、乙村忠昇、時田と  
乙廢寺、丹波と協議、午前を以て了め、  
庄日浅井平の時、伊豆の二福と想く  
あ、巻直を求む立ちばかりと通まへ立ち続

芳次今之未立

六日

日

晴、磯田鶴齋即ちもア、ジ五歳二鉢餘る。  
中村將馬某湯末月三十日日本生々とすの校  
令ニ一湯の沐浴を浴びて歸る。西京長原城内  
逍遙の生活を持てまじ是直と猶か其之御  
毫、平洋全三日既も來り御産毛を寫し  
十時半在室三長男の葬儀に臨む。香典一千山  
摺紙、御宅後揮毫、金子四千程奉三表

坂崎坦と引葉佛事西令画の研究并圖記  
を考の事外、午時江舟山三福ニ飯支

七日

晴、扇予十笏柳直毫、萬古同紀も修む、館茶  
平、シ織と於立春、高嶺ヒニシテの傳承  
事ヨリ之、嗣子と材料と微く書ニ、オ一ねの  
預金の三二十日と小切手にて引当して得る  
預金と至る十時以降も雨止、佛事坂崎垣  
之湖也を嘗め、轍印泥焉甚矣傳承

在紅紙上二三處寫著已讀。瑞貴丹三原  
年年也

八日

雨、西原長原と河内村の新井郷川口安籠防  
組合主に名常務所事務所へ地方支局宿泊する事  
出、西原村川逆流防止水門並御門の主  
要工事完成式典二十内生吉と奉行也  
御門の傍沿水化爲碑を達段云  
つき金川撰文と桂元毫毛を書ひ未だ西中

櫻原

散策北山にては雨の熱い日了々空氣  
べき地蓋の東を立つ、立時紅葉飯の睡合  
又路あね木、田や、井上、室月、僧田、生木、主  
川筋

九日

晴、市座一益教訓所でミネラル、念根ペニヤ  
全代の子、支は午後散策三紙、於けノ銀座  
食堂食を尤も、晚間時田丸其詣物を跨ち  
立野時詣其主此人正村の医酒王直

日記二年 実光也

十日

狀付平澤金三斗、押彥を交付。十斗金子様  
士ニセヨテリ送(奉)り大限令館に於き。竹花  
政茂井上祐二木橋、雜役と書ひ。是大生  
吸部もヒ利考國本。左司浅水も集  
子利美。午後散策。日幸第一二日用之奉し。物  
未ス詣候。之書矣。

十一日

度、庄司浅水より未書。仰詔大臣。淡り需。左  
(近衛前公等の思ひ)二角主。市原傳  
序ニ枝西向。移井伊川中碑。件。右へ  
右令。右ちま。右元夏司。庄司浅水ニ枝向  
款豆。農工。據公資生。墨。飯。一。淡谷。御者。セ  
塞。右。ゆ。前成。度。そ。夫。り。淡。半。れ。余。の。通。素。下  
今。レ。二。文。を。福。氣。と。之。を。需。の。外。秋。情。今。春。  
東。島。船。日。手。未。書。

十二日

岐、近衛重山公の追憶。一奉公の政大正史。詔令の施行。三月早大の國。深冬。今後。久野公等。三月。寄附金勅諭書。別々。二寶。瑜伽忠心。三月。御上引。教葉部。三福。御上。忠全。而逃走。幽鬼。清狂。相。と。蓋。大。所。向。角。谷。と。向。未。一傳。を。主。す。未。

十三日

日

岐、相。未。難。相。也。午後。本。間。久。難。耳。院。夢。

恭。の。山。陽。詩。幅。に。墨。画。近。恭。四。首。之。以。筆。丈。上。墨。と。好。之。有。方。之。と。隨。善。山。陽。政。宣。限。と。其。家。社。内。而。蒙。之。大。夕。歸。小。之。江。さ。と。五。祀。の。品。刊。東。丹。美。原。平。之。未。前。文。三。未。亡。人。形。見。う。而。そ。持。參。

十四日

時、朝東殿。相。を。筆。下。早。大。國。已。被。印。刷。和。院。書。目。称。桂。紀。部。奉。未。教。葉。高。嶺。處。人。念。中。ニ。候。生。相。東。又。難。相。と。筆。書。未。金。子。馬。以。の。二。七。〇。二。ト。リ。壹。段。工。根。公。大。隈。今。飯。今。編。

大應司院より押立を需ります

十九日

咲島の事で、也併々洋の元を傳め、家業  
リ新井紳助は但今も数利未改上山居  
リ川の江船を起し、作之木四方志の集皇國  
日本を始ま、江原の校舎今も之舟邊仁一  
山、難波を革へ時を移す、菊池密翁二十年  
経合意。五十二の登典の事業也。

十六日

咲、羽末新井郷川治水沿革史と讀み紀念碑の  
文を探る。巻頭に載り、余の役行を取のう。畠名屋  
延松部川末、角谷東の北邊上条今羽行より  
舟を積んで車道、舟橋に一・箇す。二時到着の二  
福ニ仰す。角谷東三次、酒色をあす。今度山田  
酒古、ねえ。日比谷の陶瓦屋と吹び窓の娘  
女く、勝俣鈴吉郎と通じて笑文日本風物大  
ナツナと鳴き篠田鑄造とも來也。

十七日

此時田勉至未山、勝俣銓太守に御会と見えり亦  
大島山一ノ間大失敗。紀鹿、玉崎、西洋の  
二の木村義教を殺さう。田村壯二郎甚助防文也  
協今朝三十人代氣市上業と後見、天原町耳順  
今ニ本多源氏と見五、午時殿至小治毛の途次  
轄を詰らるゝ大因邸、今朝の下前早と利きれ  
う也。苗比谷山へ陣列今朝六十六歳漢高業字  
一福上陳西村文則も于文、二官三度、此間雷に  
リ強而利く。

十八日

晴丹正原平三段酒、今朝の事多忙の松平秋壽  
向貴族院議長と内宮と都督付木侯副議長宇  
尾心潔奈良の出先も、奈良淡毛五ヶ寺、難波  
寺、美作正午、近畿一天晦冥庵、宿泊した。翌早  
川流の沿革、史と讀み大畏を領す。同  
川流の元功碑、其文を讀むと、一二事件と  
沙田家主事所、中是、大日本印本  
期配向八合手の名義株、約一石有二十石  
内子分百五十円銅板

十九日

時事記有子不以正一と東北上田義太夫も五十  
公也不与田代朱の取扱い四十才を期せ一未だ  
と仕合れ堂宇移を経て、高松名倉井金達ニ錢也ゆふ  
龍野也是下支早大蛇頭部木斯麻弓金五十七  
日領取土田とおももあす又半金以一而ま  
界利工石板印制成、金三万円月余家用の内全  
内子ニ交付、夜々今旗中美の空き伏長院平  
スハムと直錦毛昭之、防空訓練部裏の日報  
ニ置す

二十日

己

時小代多子、同大、社名乞是、大教寺、相モ  
猪八二福、役主、受付掌、嘴町永井助是、  
考文社、あつて手の感想公牧、和洋也利。

二十一日

時飯保知信、と名前立、十中の萬態も御公末さ  
立ニ差也と思は、二十八、九、車、車、令假、文化勅、  
吉野子、章の露、体生祝、莫、任、こつま未也、推  
ねと是、ま、直、峰、士、大、山、八、ム、モ、賜、る、松、原、

陈列の文外法大研墨と観て、彷彿代札に謝狀と  
あり、小葉印と七五と互び、且利弊果を知り、三事。

## 二十二日

然、内子、明栄家用三月四日立候。八月一日府糧  
布税死、ち後芳治等、是處未總浪士を寄せ  
奉る。飛鳥新羅國、海舟を御、内毛、新羅  
角谷、冷泉庄と送る。小笠井子も、東之宮故  
の本種浪士と達す。

## 二十三日

晴、小笠井と七五後芳治も、御之と夫婦、中河  
小寺、長度田係次も、五日金八押、是日額面  
改め、謝狀付ひ、未被浪士を達する時と終り、和  
田萬吉夫、未済、三上參政危馬と也く。

## 二十四日

晴、山田源作、日暮猪籠、元本二疋半、二官夏改  
え未だ丸善ニシ利也、其餘八人の名は、猪籠、  
佐友、鶴川、又、名、未だ、同行費全帳、鹿四百

二日ニニ六光也、報ひ社便等、もと未か收穫の地  
草木志を讀み、家家をりて川砂とつむ  
使事之

二十立日

岐井上村二井上底九十九石未去、牧山の隨筆  
草木志を讀む、世人が云々、其時中不<sub>レ</sub>ト丹共  
庄五、土田秀木即ちもすみか・牛絶後書  
時を移す

二十六日

以朝来難ねて參る、金澤、十日あらず入玉局  
來て鳥牛田を亦お西子、財主也、十一日生  
浦鶴はに殺し、山毛櫟黒岩松を忍びて詮幅  
取紙打立、戸川秋骨の隨筆、自言得と  
説あ、極めてへ、物の西子く、然るも氣温大いに  
加八、

二十七日

四

岐小久江真雄本日父の遺あらじと雲す

の松と雪林の陽を照く。旅館と老いた理髪室  
の次へ向ま、西氏十枚押豆毛、午後風起り  
雨やく而乞宿す、段上所居。謝儀平田忠三、角  
谷忠三次より冷菓庵と焼りうどんと別れ  
今來在日耳。二男痴氣へ為せ事なし也

二十八日

而山の店に到着。庄園の池臺下を経て、左  
司深谷、坤臺を交へ、二毛芝浦を走る土立  
之多、守尾中津河を横、午後散策涉谷

を遊んで、物語船頭先生と、坂上弘恭と、其の五  
十四家用内子ニ交付

二十九日

而、赤一郎の料金二三四引出す、内山省三と  
東云、竹村保次の、もと野澤幸之助、  
吉田有三の、田中猪四郎の、前此二三郎とも退居  
を始む。高野色志屋、飯主、山本、於林等  
産主、而上方御紀吉補欠、つまし、吉田、吉田、  
吉田、並御定約八百圓内二万圓弱、三度

三十日

雨、余の役行、市面屋の一半を負ひて手取の船  
一隻を、朝未難波にて着、又数張船毫成の  
武田上をもと善酒を貰ふ事未だ、午後而て衛門曰  
本筋に因むて賄を以て家來を遣す時  
其物を報へる。早六時から生徒旅館にて  
八日飯を食、城焼のソ軍、毛利の為め砲艦一隊等  
此一大破壊、一過也の報、ラジオも已傳へる

七月

一日

雨、金三万四十日預金引出す、早大出版部より  
中え三千二千は、浮き、二玄臺改定と未開  
光の体、うち、元日用品を准の全量(?)支度  
付、二万円内子、残りる。万二十五日月額四千、清  
す西川一孝より、小流生活と接ひ、市面屋下車  
を收めり、報酬私少々、植利。

二日

墨ノ羽水は子え子の如く生れ。余の後裔近衛  
重山公通孫也。故ゆき於法には大志田史海。一稿  
着。つ西宮をもとへて今通す。別名市島德厚  
と。礼。可。身訪。後孫が信。未ひ。村山秋浦。號  
三左。性。の如き。毛色。惣。三黒。毛。黑。朝。多  
記者。食。先。候。大。限。候。百。日。拝。手。多。う。足。牙。酒。七。夜。  
十。時。三十。分。上。飲。酒。多。う。足。牙。酒。七。夜。  
赴。一。行。去。江。晉。松。山。本。忠。兵。二。將。士。也。

二日

今。土。草。北。母。宿。を得。矣。ち。玉。野。主。川。上。法  
局。相。付。中。ア。キ。乗。り。あ。レ。ル。野。主。モ。内  
校。交。四。五。の。出。心。を。手。ま。け。七。時。三。十。分。移。る。着  
多。数。の。校。支。出。心。と。算。算。の。施。教。着。後。直。呼  
す。丈。久。教。授。副。主。官。将。助。七。光。昌。の。主。四。考  
人。等。ミ。合。す。一。年。行。の。二。人。と。深。天。精。を。移。す。一  
時。多。詳。候。今。を。つ。あ。く。余。ハ。今。ヒ。臨。ま。る。東  
家。角。美。三。次。と。深。入。難。か。事。を。取。す。且。時。主。行  
形。章。と。利。ス。大。今。の。済。し。ま。す。余。平。大。り。立。狀。に

私の一場の汽船をさし宴に入り金子より百名  
余亦模様汽船を多め例の如く献碼（ハタケ）にた殺さ  
九十時漸かく群衆を旅館に泊り休み、或五十鶴  
もゆく

四日

日

所、今日朝起きて一場の浴便をする予豫定之、  
乃井綿川を出立し而後御茶の会と就く飯堂  
の食事は大將家家（ヨシキヤ）に来るよつて接待の為め  
洋在と由義をとさん七日帰京と決て一二の端

書を東京へがる。而後は日本公司訪問の予定  
楊の毛面を以て、直路の丸製大鋼車両を  
工場をまち、大阪の三宮支店と電流を交換する  
至る。作業木板化耳板、此ニ刀工屋松井  
の手を抜く。十一時校査有志二枚、  
鉄道車輛と利口鉄屋屋外の多忙の収集  
中止。午前終山本吉江浦人泊東京に連  
ニ就く。余の自動車と能力を重ねて習  
先が中尾のモリの二宮甚文治外二三氏  
訪ひ未だ小憩の後、丸井よりおなじく

学校の説演会に臨み、丸子役を踊らしと  
和也もさすがに余の桜見事の點面二三擇す  
有り。今日の生徒たる教育者、耳聴の家  
令女不<sup>可</sup>能<sup>能</sup>の人々も七十名出でる  
リ、金の鍔<sup>鍔</sup>の縁側を敵へて人間の精神  
極凍の是處もさう年々の自らの自相を約一  
時間説いても出席者十人長柄洋武男  
助役本間忠太郎、カイニヘル志一の文  
古松長等、今まで済候終つて結志園に  
入り全の前年作<sup>は</sup>を生地<sup>は</sup>は<sup>は</sup>士撰文

樺原製

の園<sup>は</sup>の扇歌<sup>は</sup>表<sup>は</sup>もてんのとぞ。古川  
亭の聖<sup>は</sup>を<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>せ<sup>は</sup>下<sup>は</sup>教<sup>は</sup>各<sup>は</sup>北<sup>は</sup>の主<sup>は</sup>主<sup>は</sup>  
席<sup>は</sup>、余<sup>は</sup>歌<sup>は</sup>怡<sup>は</sup>有<sup>は</sup>歌<sup>は</sup>祀<sup>は</sup>き一<sup>は</sup>場<sup>は</sup>の後<sup>は</sup>  
と<sup>は</sup>成<sup>は</sup>ひ、と<sup>は</sup>は<sup>は</sup>歌<sup>は</sup>後<sup>は</sup>序<sup>は</sup>と<sup>は</sup>夫<sup>は</sup>し、九<sup>は</sup>歌<sup>は</sup>し  
宇<sup>は</sup>居<sup>は</sup>方<sup>は</sup>到<sup>は</sup>る作<sup>は</sup>表<sup>は</sup>反<sup>は</sup>石<sup>は</sup>つ美<sup>は</sup>音<sup>は</sup>子<sup>は</sup>原<sup>は</sup>  
鈴木文平七未<sup>は</sup>、置酒<sup>は</sup>洪<sup>は</sup>淪<sup>は</sup>十一時<sup>は</sup>度<sup>は</sup>此<sup>は</sup>  
く<sup>は</sup>居<sup>は</sup>四<sup>は</sup>五<sup>は</sup>車<sup>は</sup>主<sup>は</sup>其<sup>は</sup>事<sup>は</sup>の二<sup>は</sup>高<sup>は</sup>七<sup>は</sup>  
曾<sup>は</sup>、今<sup>は</sup>在<sup>は</sup>之<sup>は</sup>處<sup>は</sup>方<sup>は</sup>右<sup>は</sup>三<sup>は</sup>

立四日

立時起床、一浴後主人の作庭を休ま、柄津町  
長末り、余家の総志園と所の公園ニ家の附  
さんきこすと云々し余の奔走も済み二度度  
済もあらず、興平酒舗の醉翁亭待遇の匙<sup>シ</sup>  
さく需ひ立ち付立毛漆山より余の七八種の  
泡巣<sup>ハコヅ</sup>詫卷を亦ひさんとすと需めとて  
喫飯の後別と告げ自動車で駆り、天王の  
宝家を行ひ、偶々村祭あり、各地と来未<sup>シ</sup>  
群毛をなし一打蟹<sup>ハタタガ</sup>の漁<sup>シ</sup>、土田より大山<sup>シマ</sup>と來  
道手新井御川沿い検査計の筋めとす

小舟達三色戸主心紀志忠喜吉治和但合<sup>シ</sup>  
間保ある故に以て同船先づ福山濱を觀察  
船木川河口より河蟹川の新井郷<sup>シマ</sup>に注ぐ、  
佃木を發令し、終ニ圓<sup>カク</sup>門を又、堰割溝<sup>シ</sup>  
④注<sup>シ</sup>二十町<sup>ハチナント</sup>工事<sup>シ</sup>を之々九間時<sup>ヒメ</sup>を費す  
二時間、遂<sup>シ</sup>松ヶ崎<sup>シ</sup>上陸某處に入り午前<sup>シテ</sup>三  
共<sup>シテ</sup>了<sup>シ</sup>、新雨<sup>シテ</sup>幸村<sup>シテ</sup>幸<sup>シ</sup>、新井郷の五三<sup>ハ</sup>  
豫防<sup>シテ</sup>合意を成る地方下船<sup>シテ</sup>在<sup>シ</sup>未<sup>シ</sup>全<sup>シ</sup>し、  
碑文<sup>シテ</sup>の件不付多<sup>シ</sup>の余食を予<sup>シ</sup>、幸村と自  
動車<sup>シテ</sup>其<sup>シテ</sup>四時<sup>シテ</sup>新<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>、金<sup>シテ</sup>ヤ<sup>シ</sup>ニ

三四ハシリの故障と遇め、此り其様の家時を  
りきりも入歸す。一し止み、土田に押立と移る  
皆が、若茎し若く、川の大船を切り得んと假  
て度方をツス。今日走すカイグを淨念寺を訪  
れて展墓也。も詠歌。極久。市恵大將ゆ  
る家宅に着まつた。是事はあく家主人  
めりゆく。今、有ねた。家家にだ。今日  
午後、乃向。約束。東京江戸駿河。令希。丹波  
彦平。二間。今起。春を漱。早く就寝  
初め。既睡。

六日

今朝驅在。呑茶味を主と。能く半日休養。以  
後供に存。役口歎き。上松井にて。法事。先一時十  
三分。能主。之を望矣。全一時五十分。汽車  
三天王。三赴く。之。天王と私と。主と。四本  
二つとも。新島の勘定を。も。済す。越後味噌。算算  
菜數支。家甚。持物。正午。雨。施食。  
勘定。益代。百十円也。一時。津。汽車。主と。次  
モ。天王。内。私と。自取也。の。而。を。受取  
て。家客。入。多。人。主。西。西門。并。字

尾山より謝ねを寄せ年三 午後六時宇垣大  
將軍をすすめ入り未だの泡に二へと移る之は  
日本古事記を祀る神義宮へ祝書を入  
特の骨燐也、余の大將に令する始終も大將如  
才うる人ニ接し人として大將を蒙ぐ一ひ十鶴  
の後福島鷹五終と金を家家々定後の川  
と小艇・三艘と艦にて蓋革の舟を行  
七十數千石も間に出づ浦に湖海のことし  
口漸やく浅せんと一暮を盡極りて舟を停  
毛豆麦酒を傾け血を以てす田ぐ、等の御を

橋原製

あさーと小鱗を漁す。本一時也、淡々笑ひ路  
ス走り、晚日の席に就き少く八時を過ぐ大將よ  
く飲み本命セ十二大予うち四嵐若き才命三  
毛波の壯健、全の酒量大將ニ敵する能ひて、醉後  
立ち去り一睡天明到る。

七日

時、今朝一浴、八時半起一歩移り向つて去る。余人  
の為りまことに無事、經册茅の初夏も、主人支度も  
あ時迄し、午後別とまじ、社の有事事のり酒室

・授さんと自鶴さんも兵庫を越へ、天王山園で停  
車せざる故也。ちぢ門三元もまことに、おとぎ  
3. 五時トシナルムハ、リ三十枚今ヨモ五上ニ着す。  
車中無聊モ誠レ合モ入り及酒を飲く。  
八時三十分上町ニ着クテ、伊庵、家人報す  
母夫婦平一病、父出京病院ニ入ル。家人報す  
五日也、穂枝の女、外に嫁す。あら庵、  
件純事、未だ、高山君、さむる私部典訓  
巻一冊東莞書院、千村先生の注釈  
獨り、も家を廻る。九時ニニ幕母其辺

穂原園

八日

岐玉鉄道永格工事、乞山湯新築、官舎を老  
川隣宅をかたむ、余の卷割、正書ヨリ電信  
手車送る、角谷某三次、矢野、野野村、春木、小安  
堅三、も白石、利夫、田中穂種、早村と名す、  
山田、久元、耳接、午後向大寺の宿泊、大澤、志保井、室  
穂、忠是院、雅考、此役成り候と云、一部と始ら  
、遂に立候、間す、行はば、飯、大澤、志保井、室  
龍吟社の草村裕雄、モキヤンビーン、一翁利

東午後雜記と筆致

九日

佐藤のうちあす河内丸山は島、南坂に丹生、西  
吉野川橋を渡り、市有三福に渡してゆく。お湯角  
内喜三次を來る。伊勢鳥居越えて北本  
二日支那軍、宍戸一左衛門の形をうけたる支那  
軍北朝多勝子酒器十とひな、難かぬが、  
双方を九傳よりとす。午後雜記と筆致とま  
時後だをとす。三時雷鳴あり、雨も僅し未だ夜。

入り状一通、炎熱解消

十四

岐、朝未寝紙を書き、久以有三としめと賄ひて  
ゆき、刈り市山の死を心事中止して病の種り病を訴  
来、二十日を過ぎ、河井を除役向こうの木派を志願  
し未だ油印をうづむ。河井も之に近寄る。既に得  
近松名は集上者を頼む。中略處自ら申す  
付の意の如き、承認。中村支那の説明  
猶ほ古文書平太生版即ち少年の文が送り

能本、大賀一郎、協士、大隈家、大隈、豊田、徳川、  
を接待。所持物、其他の微、皆列す。宿、未雨。

十一日

日

今朝より、日本、支那、俄、西、四國に報ず。支那側、矢張  
中、全、一、ト、是、モ、守、ム。不滅、志、深、久、シ。蒙、ニ、全  
面的、衝、突、ク、激、烈。以、危、陸、軍、敵、官、派、立、港、之、  
と、傍、メ、或、ニ、之、モ、蔵、从、不、ハ、冀、察、モ、煽、動、セ、日本、  
戰、ノ、ノ、甚、甚、美、察、の、敗、北、キ、來、レ、レ、荷、ハ、已、  
手、甚、甚、泰、モ、收、ム、ト、モ、猶、幸、モ、ト、モ、森、關、多、

相、丹、吳、代、東、近、冕、三、レ、未、少、リ、少、御、カ、八、報  
ト、秀、月、此、將、可、用、元、行、核、モ、紀、傳、急、行、才、三  
禮、湯、全、文、配、備、ニ、到、ク、ト、中、元、の、贈、リ、相、助、名、モ、  
和、入、リ、政、府、重、大、廳、而、ミ、中、外、ニ、考、ス、武、三、外  
二、人、朝、来、芝、モ、如、シ、庭、園、モ、移、陰、景、ミ、セ、新、モ、也、  
休、多、多、多、清、燒、モ、翁、也、

十二日

此、今、朝、の、終、底、ハ、北、支、事、處、の、忙、滿、載、歌、の、氣  
も、漲、う、新、有、一、行、キ、モ、多、モ、灰、之、の、故、年、暮、淵、歌、

晦を挂ひ又クチナレの金哉を締テ三福、飯トモサ  
京都下村西大らゝ大賀佐太の錦糸曼陀羅致と  
帰る。また辰巳の泡巻と復古。

十三日

喰相手難波と奉事。河井殿後と東山。よの  
横山、喜代四重江、丹波、原平と協手。高取は客  
未也、中元賀品類。利五。余の後花と水のみ  
東洋色味利五。四月七日。先と伴山家散策不自由  
の休業。酒飯一にて物。府税市税完済程徴

橋原敷

雲刈り

十四日

雨後晴、高瀬川三日引。戸の人深作貞次烈  
公の便後の一ちる反射燈の直達石後り、東浦元  
師の絵本歎章と刻もんと紀文と余て沙上内  
縦文と述べて应ず。難波と奉し併せ少少  
立ち候。今朝之餕。切つ。辛庵を過ぐ。其  
也、以日便暮。因一夕多め不前と服玉。辛庵室  
ニ投宿。天衛日報社を拵す毫に案り耳さ

十五日

此日臺元を美術日報に寄稿、西村文四郎來  
土田秀太郎三投函、協平病状の手札、丹玉原  
平之助状と秀太郎、京家の絶え困る事、乃原河  
長柄洋武男、山城を馬場、衆演説文記  
支長田二郎一、喜鳥壯一郎、行佐も山陽詩陽  
日鎧宅を訪ねて、其處北一郎、洋風と送  
来、

十六日

株原製

此日朝未旅館を出、而村文四郎、枝前、宇居  
町宿へ、また、先と併せて、ハートス協平の  
合約と、株仙元と又義正やう。午後亦旅館と  
革す、而枝の銀子へき算も、西村文四郎、枝前  
旅館の金、寄附金二十山口利未、神奈川  
群馬二組に蒙るあり、終業大

十七日

此日旅館を出、而村文四郎、宇居町宿へ  
在はる、旅館に物と縁小伊勢丹吉井、販賣物  
毛馬押尾、吉野駒の通事、を渡し、如何

若市三日 来り得一蓋カバ 31公文 四防と反射鏡  
を貰ひ、又貰金と終り

十八日  
晴和未難狂妄、堅忍無事例の江射を受  
く。高麗市三日 来候。丹吳府平、高麗市奉  
崎敵來候。高麗市三日 その家の門り中車の  
小舟を投す。

十九日

穂原製

晴、高麗市、宿、十日教主日本橋、已て稍詳し木  
下至大市、木下、臺林間歩、と將入、終々不公、四、八月  
坐、呻き聲、冊子、毛毛細汗、搔手、つこつこ走り、不  
暁の家入、未だ、午後叶、一、泣、牛込区  
土地、征、價格、請、査、臺林、蓮岸、投票人場  
參判、(七月廿七日)二、三人とも、氣を高め、不  
土、水、浴、更定、毎、御膳、猿乃井利、蓬の  
合意未也。

二十日

晴、至三一早、大トルストイ全集(一日一巻上)を了  
セリ。後四日又読矣。殊、丹玉原平の如きは専示毛  
麿、妻、二百四十弱の男の來、土時、毛麿、東、三  
川、文鴎も鷺之、木下、立太ら、泡屋、中の森政の  
侍を後取、克平、長春店、開、其之年の泡屋  
敵を沈黙セー也。

二十一日

晴、丹玉原平久一、同支政昇、経未下  
寄稿を需め未ヨ。非私を考すと時を待て丹玉

金の、牛山協吾、一為めや、父と號名  
三教、三福に假して仰く、木下立太らり也  
某と達み時を移す、秋濤今も、古の秋濤  
の聲、例來、二宮、度改、其、耳前、  
ま。

二十二日

晴、朝采能紙を養す、秋濤の色、秋と達む  
於近政界、未二、有事、長田秋濤を稱す既存、  
玉之子、寺尾元彦、事跡、玻璃、芭蕉布を贈

二十三日

晴。多特モ議會召集。平洋金三ヨリ山陽のむ  
の船室とを由四村社ニ即其船、朝未至。船を  
着下し、併シ、散策、但木丸にあと達ひ、其處にて  
予晴し物見石巖を忍んで至前を作事終ニ  
脱舟。佐多島港伊月通水ミ。丹生モ原モ未だ

二十四日

晴。風界従未ゆき。東禱を被郵、ヨランビヤ大音り  
效。度極東。深浦家十サニエル、ベツアアのア母長懶

樺原製

の支那を飛。一ふーの演説を讀み、乗組因子承る  
午後を供す。午後旅館を着て、移行高松銭  
二ノモ吃生糸の味喰は。一朝是日未だ。

二十五日

日

晴。高橋鉄二、あらせり、六九月白木局を今  
場ト大隈慶生誕百年と紀念する辰後をと  
用ひんとし、橋門町多モレヒ、本社主催とも紀念との  
事蹟を技術未だハ林壁三年前相亮モ講セん  
且約を終り、散策、御宿、浦口浦、向日、先越モ未だ

とお井伊川沿み紀功碑の爲を爲す

二十一

（我等の）

暨、ひさの跡かの報と、支那側電化修繕を終け  
我等、立候（即ち三社）と報す。又其御用以  
如碑の形を修め、山里處に、又彷彿參る今  
本紀奉。ナ波碑文稿、洋書土田秉太郎先生  
氏、ハワイ、ホノルル、著山崎正之、日本未  
日本勧業銀行、急急金利、年率、高矣  
市役所とも昭和十二年八月、乃て改良義人

七十一四三十九（八月十日）の繳票列  
又、大木主計、五十島旅館も、新油一箱列  
未だ且向

二十七

雨乞御在時地宮事、又又、社の後本より余の附  
葉中、今の一席を擇様乞之事と書て置く  
中村星湖（星）の御大限令紙、日本文部省後之奉  
故今を、又、余に余へ出處を求める事又散策  
千住を訪ねて、おと頃、ふとあそびと見狀、雅近

到着にて坪の文便に加筆をあらわす。尔久  
一月三日到り大トルストイ全集を手元を離る  
東京にて本屋部屋余は隨筆を數一束と箱没  
即ち返簡を投す。東京日々の事。

二十八日

晴、朝来東京にて一枚多く随筆執筆二三篇  
成る。左角紙の仕事にて画幅の鍵を失ひ某  
が奉東書道院にて安否を一尋めまつて後  
又一稿成る。小林儀にて大手長瀬まである。

糠原製

午後中田山主見廻

二十九日

晴、皆葉心地隨筆一通一枚手草と並筆成  
る。右標にて元も送、田口所一の為山陽道宿の連  
函にて支那へ後藤翁羽舟も東京、ホー  
ムに旅金にて出で、小林儀にて小峰亦  
手に投簡、所支の額のみ報す。藏人曰此に天津  
にて日本組界地をとる。今晴と大瀬船と浮  
ふ午後奉東書道院の後にて、良寛の手紙一行

を言ふ。色あはれ。記述(きじゆ)を乞ひ。月三十時。行の宋  
米と味噌一樽刊表

三十日

久流天皇祭

皮丹共麻平ニ協平の病状を被る。極端に一年  
未だ。暴刻毒害を利行する。余々或ひ部分を擾  
あやまつて。或は栗林母子手足。被肩に激打を割  
死神を経て三禍三嘔多。協暴病状を著す。猶病  
を歎泣甚しき。手足を施す。通也。於是日日本人差  
殺り。窮ふ出づ

